

【旧約聖書日課】サムエル記下 18章24節～19章1節

18²⁴ダビデは二つの城門の間に座っていた。城壁に沿った城門の屋根には、見張りが上って目を上げ、男がただ一人走って来るのを見た。²⁵見張りは王に呼びかけて知らせた。王は、「一人だけならば良い知らせをもたらさだろう」と言った。その男が近づいて来たとき、²⁶見張りはもう一人の男が走って来るのに気がつき、門衛に呼びかけて言った。「また一人で走って来る者がいます。」王は、「これもまた良い知らせだ」と言った。²⁷見張りは、「最初の人走り方はツァドクの子アヒマツの走り方のように見えます」と言った。王は、「良い男だ。良い知らせなので来たのだろう」と言った。

²⁸アヒマツは「王に平和」と叫び、地にひれ伏して礼をし、言った。「あなたの神、主はほめたたえられますように。主は主君、王に手を上げる者どもを引き渡してくださいました。」²⁹王が、「若者アブサロムは無事か」と尋ねると、アヒマツは答えた。「ヨアブが、王様の僕とこの僕とを遣わそうとしたとき、大騒ぎが起こっているのを見ましたが、何も知りません。」³⁰王が、「脇に寄って、立っていないさい」と命じたので、アヒマツは脇に寄り、そこに立った。³¹そこへクシュ人が到着した。彼は言った。「主君、王よ、良い知らせをお聞きください。主は、今日あなたに逆らって立った者どもの手からあなたを救ってくださいました。」³²王はクシュ人に、「若者アブサロムは無事か」と尋ねた。クシュ人は答えた。「主君、王の敵、あなたに危害を与えようと逆らって立った者はことごとく、あの若者のようになりますように。」

19¹ダビデは身を震わせ、城門の上の部屋に上って泣いた。彼は上りながらこう言った。「わたしの息子アブサロムよ、わたしの息子よ。わたしの息子アブサロムよ、わたしがお前に代わって死ねばよかった。アブサロム、わたしの息子よ、わたしの息子よ。」

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙 6章14～18節

14しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。¹⁵割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。¹⁶このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。

17これからは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。

18兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように、アーメン。

【福音書日課】ルカによる福音書 14章25～35節

²⁵大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。²⁶「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。²⁷自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。²⁸あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。²⁹そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、³⁰『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。³¹また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。³²もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めよう。³³だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。』

³⁴「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。³⁵畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。』

塔を建てる者のように【こども説教のために】

主イエスは、安息日の食事の席で、「神の国の食事」のことをお教えにられました。それは、家族や親しい者、お返しをし合えるような者ばかりが招き集められる食事ではありません。誰でもが、特にお返しできないような人が、敢えて招き集められる食事こそ、「神の国の食事」です。主イエスは、「神の国」の始まりをお告げになり、食事の営みを通して「神の国」の建て始められていることをお示しにられました。

主イエスのお働きは、弟子たちの「教会」で受け継がれました。「教会」は「神の国の食事」を目標に、誰もが招かれる交わり、何のお返しもできない人や子どもたちを喜んでお迎えする働きを、続けてきたのです。

ここには、誰もが招かれています。何のお返しも必要ありません。お返しをしなくても、何も支払わなくても、ここにいて良いのです。わたしたちと一緒にいていただきたいのです。

ただ、この働きを受け継ぐ者が必要です。主イエスは、ご自分の働きを受け継ぐ「弟子」になるようにと、食事に招かれた人々に呼びかけました。「弟子は師にまきるものではない。しかし、だれでも、十分に修業を積み、その師のようにになれる」（ルカ 6:40）とおっしゃいました。その働きを成し遂げるために、「塔を建てる人」のように準備をしなさい、「隣国と争う王」のように和解の準備をしなさいと、主イエスは今日、お教えなのです。

「代われるものならば」

石神井教会の主日礼拝で朗読される聖書箇所は、日本基督教団の定める 4 年周期の主日聖書日課に従っています。四年ごとに、同じ三箇所の主日聖書日課が巡ってきます。

今日の主日聖書日課は、わたしに一つの強烈な記憶を呼び覚まさせます。16 年前の 9 月 9 日。前任地教会の礼拝では、やはりこの主日聖書日課が朗読されました。その教会では、原則として役員が司式をし、聖書朗読も担われていました。その日の司式役員は、ベテランの女性信者でした。いつも安心して司式を任せられる方でしたが、その日は違いました。聖書朗読が始まると、彼女の声は裏返り出したのです。そして、涙を拭いながら、どうにか朗読を終えられたのです。そのとき、わたしはあることに気づいていましたが、礼拝はそのまま進行しました。礼拝後、いつもそうするように司式者の彼女のもとに挨拶に行くと、彼女は開口一番、こうおっしゃいました、「先生、今日の司式は、わたしにはきついですよ」と。何事にも弱音を吐くような方ではありませんでしたから、わたしは、「おっしゃってくださいればよかったのに」と応じてしまいましたが、すぐに後悔しました。わたしは、聖書朗読が始まってすぐに、気づいていたからです。彼女は、数年前に御子息を若くして亡くされていたのです。

旧約の英雄ダビデは、ユダとイスラエルの王として君臨していました。王として、多くの王子を得、王位を継承しなかった王子たちは祭司の身分を与えられたと伝えられています (サム下 8:18)。しかし、王子たちの間で王位継承をめぐる争いがなかったわけではありません。第一王子アムノン、兄弟間の争いを起こし、第三王子アブサロムによって殺されていました。アブサロムは、外国の王家から嫁いでいた生母の実家を頼って三年、逃亡生活を送りましたが、父ダビデ王の赦しを得て、帰国していました。しかし、父ダビデは、帰国したアブサロムとの謁見を拒み続けました。兄殺しをした弟息子に対して、父ダビデには深い葛藤があったのでしょうか。そのような状況の中で、王子アブサロムは、イスラエルの人々に担がれるようにして反乱を起こしたのです。アブサロムが彼らによって王として立てられると、ダビデは家臣らと共に都エルサレムを離れ、ヨルダン川の東側、ギレアドの地のマハナインに陣を取ります。決戦の結果は、軍師ダビデの下にある精鋭軍の圧勝です。アブサロムは、最期には、ダビデの側近で軍司令官の従兄ヨアブの手によって討たれてしまいます。その息子アブサロムの死の知らせを聞かされて、父ダビデは、声を上げて嘆いているのです。「**わたしの息子アブサロムよ、わたしの息子よ。わたしの息子アブサロムよ、わたしがお前に代わって死ねばよかった。アブサロム、わたしの息子よ、わたしの息子よ。**」

憎しみなのか、愛なのか

「愛の反対は、憎しみではなく、無関心です」と言ったのは、マザー・テレサでした。「愛憎相半ば」とはよく言ったものです。「愛」と「憎しみ」は、わたしたちの心の感情の同じところにある、コインの表と裏のようなものなのでしょう。どちらも、自分と関りのある者に対する強い感情なのです。わたしたちの親しい者同士の感情、夫婦や親子、家族の間の感情は、しばしば、この「愛」と「憎しみ」を同時に抱えたようなものなのかもしれません。

主イエスは、「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうと、これを憎まないなら」とおっしゃられ、「そうしなければ、わたしの弟子ではありえない」と強くおっしゃいます。「憎しみ」が「愛」と表裏一体の感情なのであれば、「これを愛さないなら」と言うてくださればよいのではないのでしょうか。それとも、この「憎しみ」とは、マザー・テレサが言うところの「愛」の反対物、「無関心」のことなのでしょう。

ダビデは、兄殺しを犯した弟息子アブサロムに対して、ただ憎ければ、すぐにでも処罰を下せばよかったのです。しかし、彼には、弟息子に対する愛がありました。アブサロムも、ダビデの息子の一人なのです。兄弟殺しによって、息子を二人も失うことは、父親として耐えがたいことだったでしょう。息子に対する愛と憎しみの葛藤を、ダビデは、息子を遠ざけておくことで耐えていたのかもしれませんが。しかし、アブサロムには、その父の思いが分らなかったのでしょう。父に対する愛と憎しみの葛藤を、耐えることができなかったのです。それでも、ダビデは、反乱を起こされたとき、すぐに討伐しようとはせず、むしろ都から退去していました。そして、いざ会戦となつてからも、家臣たちに「若者アブサロムを手荒には扱わないでくれ」（サム下 18:5）と命じているのです。「父の心、子知らず」なのです。

主イエスは、「人々に憎まれるとき…あなたがたは幸いである」（ルカ 6:22）と言われ、また、「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい」（同 6:27）とおっしゃいました。人に憎まれたらどうしたらよいか、わたしたちは教えられて知っています。けれども、本当にその意味が分かるようになるには、わたしたちは、人を憎むということがどういうことなのか、自分自身のこととして知らなければいけないのかもしれません。

それが「愛」と表裏一体であること。ときに「愛」と「憎しみ」の葛藤から逃れるために「無関心」を装うこともあること。等々。

それは、「神の国の食事」を営む「神の家族」という新しい交わりの事業を託された「教会」でも、知っておくべきことに違いありません。その働きを担う「弟子」として、それは、塔の建設計画に増して大切なこと、王の和睦外交のように賢明な判断の中で為されるべきことなのです。